

日本大学法学部 福島ゼミナール 『登別からNoboribetsuへ』 ～世界に向けた観光政策～



中国は、経済発展で富裕層が増加しており、中国から出国した海外旅行者は、5年で2.8倍に急増しています。2006年には約3,400万人の海外旅行者が、このままのペースだと2015年には5,000万人を超える見通しです。この5,000万人というのは台湾の総人口約2,300万人、韓国の約4,800万人を上回る数字です。

そこで中国に注目し、観光政策を支えるための『温泉コンシェルジュ』を提案します。

この温泉コンシェルジュの担い手は、シルバー人材センターの高齢者や幼児、小学生です。幼児や小学生には初級中国語教育を行います。簡単な言葉でも話せれば外国人観光客も安心します。大事なことは、外国人観光客の不安感を取り除くことです。



そして、高齢者には観光案内を担っていただき、そのときには小学生と高齢者がチームになります。

この政策では、**▲市職員に質問する学生** 他国の文化に触れることで見聞を広めることができ、地元の観光や歴史を理解することができます。これらを行うことで真の国際人を育成することができるのではないのでしょうか。

わたしたちが考える真の国際人とは、自分たちの文化に誇りを持ち、外国の人に紹介できることです。

また、小学生を取り入れることで長期間続く観光政策になるのではないのでしょうか。

立教大学コミュニティ福祉学部 2007原田ゼミ (B)

『生き生き！生きがい登別』 ～観光中心政策からの脱却～



登別と聞いてわたしたちは温泉というイメージしか浮かびできません。登別市は温泉観光地として全国的に有名で、観光を地域活性化の基幹としていますが、

観光だけが地域活性化の方法なのでしょうか。市民のより良い生活を実現することも地域活性化の重要な要素ではないのでしょうか。

わたしたちは、内部からの地域活性化を提案します。

この提案は、市の中心地に居住施設を建てることから始まります。施設内には居住施設のほか、ケアハウスなどの介護施設、育児施設、公共施設などを併設します。その施設を中心に市民同士の自由交流を促進して新しいコミュニティの創出を図ります。そのため、施設内に住民のコミュニティ形成の場として市民スペースを設けたいと思います。

そのコミュニティをきっかけに、地域に貢献しようとする方々が集まり、実際に活動していくことができます。

わたしたちは人と人とのつながりの形成のために市の中心部に人を集め、そこに集まった人たちが地域活動を支援し、市全体を活性化させていくことが重要だと考えます。

市は市民の負託では成り立ちません。市民が一市民として地域の問題に興味を持ち、自ら率先してまちづくりに貢献することで、観光資源や文化、歴史などにとらわれないまちづくりができるのではないのでしょうか。

同志社大学工学部 藤本・千田研究室 サスティナブル・アーバン・シティ研究班 『登別版 LOHAS』



ロハスとは、地球環境保護と人々の健康を最優先し、持続可能な社会のあり方を志向する生活スタイルのことです。

それに『登別らしさ』として温泉や自然、食べ物、そして健康や持続可能性などを盛り込んだ登別版ロハスというものを考えました。

健康の面からは、海や山の幸を盛り込んだ健康食品、温泉を利用した美容や治療、自然を利用して運動することで健康になるというライフスタイルなどが考えられます。

また、環境の面からは、温泉を利用した地熱やホテルの排食油を再利用することなどが考えられます。

このようなことで、温泉の差別化が図れます。登別といえば温泉というイメージが一番強いと思いますが、ロハスのような違う視点で見ることやエネルギーなどの環境に力を入れることで、登別温泉自体に新しいキャッチフレーズが生まれると考えられます。これにより、登別市が再度注目されることが期待されます。



▲観光客へのインタビュー

2つ目として、修学旅行生の誘致です。これは持続可能性の面からですが、環境問題に取り組んでいるということから、社会学習の一環として修学旅行で登別市に来ていただけるのではないかと考えます。